

5年一貫看護師養成課程における生徒・学生の 職業的アイデンティティ達成スタイルとその関連要因

三津橋 佳子 埼玉大学教育学研究科 学校保健学専修
関 由起子 埼玉大学教育学部 学校保健学講座

キーワード：職業的アイデンティティ 看護教育 5年一貫養成課程

1. はじめに

わが国の看護師養成制度は、高校卒業後看護系大学や専門学校に進学する者、中学校卒業後に看護職を目指し専門高校に進学する者、また大学卒業後あるいは社会人経験を経た後に希望する者など様々である。この中の1つである高等学校における看護教育は、昭和39年、高等学校への進学率の向上に伴う高等学校教育の多様化の必要性、女性の職業分野への進出、看護職員の不足等の当時の社会背景のもとで、准看護師養成のための衛生看護科が高等学校に設置されたのが始まりである。昭和43年には看護師養成のための専攻科が設置され、平成14年には5年一貫教育による看護師養成が開始された¹⁾。平成27年現在76校、1学年の定員は4135名²⁾、平成25年度看護師国家試験新卒者合格における割合は約5%³⁾である。高等学校看護(以下5年一貫校という)は、これまでも強い使命感や高い勤労意欲をもった生徒を輩出し、医療現場や地域社会からの高い評価が聞かれる一方で、5年間のモチベーション維持・継続が困難な生徒の存在が報告されている¹⁾。5年間の教育期間において、5年一貫生が自分なりの職業観を確立し、看護実践ができるよう、職業的アイデンティティの形成は必須であると考ええる。

アイデンティティとはEriksonが提唱した概念であり、自我同一性と訳されている。谷⁴⁾は、Eriksonの自我同一性概念を「a自我同一性の感覚とは、自分自身の斉一性・連続性と、他者に対して自分が持つ意味の斉一性・連続性が一致するという感覚、b自我同一性の感覚には、自分が理解している社会的現実の中で定義された自我へと発達しつつあるという感覚、すなわち心理社会的同一性の感覚が含まれる、c自我統一性の統合が行われるのは、青年期である」の3つに要約している。Eriksonのアイデンティティ理論を発達させ、特に青年期のアイデンティティ形成にすぐれた視点と研究法を提供したものとして、中西⁵⁾はMarcia, J. E.のアイデンティティ・ステータス論を紹介している。これは青年期のアイデンティティ達成を、危機と積極的関与の有無によって、アイデンティティ達成、モラトリアム、早期完了、アイデンティティ拡散の4つのスタイルでとらえたものである。これにより青年期のアイデンティティ達成の質をとらえることが可能となり、個人の自我同一性の達成状況を、心理社会的な基準からの確に示すことができるとした。

青年期におけるアイデンティティ形成の社会的役割の獲得において、下山⁶⁾は、その中心的位置を占めるのが職業決定であることを示唆した。この青年期における職業的アイデンティティを、岡本⁷⁾は「職業的アイデンティティとは自分らしさの確立と深くかかわりながら、職業に関心をもち働きかけることによって達成されていく」としており、職業的アイデンティティの形成は、青年期におけるアイデンティティ形成に重要であり、その形成を促すことが社会との関係の中で自己を統合し自分の生き方を見つけることにつながる。

グレッグ美鈴⁸⁾は、職業的アイデンティティを看護師との自己一体意識と定義し、個々の看護師が職業的アイデンティティを確立することは、看護の質を向上させる1つの方法であると考えた。しかし、岩井⁹⁾は、臨床看護師の看護活動に関する問題報告から、看護師が自らの職業を価値づけられていなく、看護職の職業アイデンティティの欠如を指摘している。また、看護師の職業的アイデンティティ確立のためのプロセス全般において、教育や学習は深く関係しており、久川¹⁰⁾は、看護の学習は学生の職業的アイデンティティ達成を促し、アイデンティティ達成は看護の学習を更に深めると螺旋状の発達をすることを明らかにしている。一般的に職業的アイデンティティは、その職業に就いてから形成されていくといわれているが、看護学生の場合、入学前から看護師になりたいという強い意志を持ち入学し、学生時代に職業教育も行われることから、看護師としての職業的アイデンティティの形成は入学時から始まる¹¹⁾。大部分の看護学生は青年期にあり、自分なりの考え方、価値観、人生観をもち、職業選択やキャリア発達が強く関連する一方で、アイデンティティの確立につまずき、挫折してしまうといった危機に直面し、アイデンティティ拡散¹²⁾の状態が現れやすく、問い直しを必要とされる時期だとも考えられる。山内¹³⁾は看護学生の職業的アイデンティティの形成過程において、自分の職業を見いだせないまま進路決定をし、職業に対し迷ったり葛藤したり、そのままの状況で卒業している看護学生の存在を指摘し、アイデンティティ形成についての課題も多い。

Marcia, J. E.のアイデンティティ・ステータス論を用いた看護学生への調査結果として、松下¹⁴⁾は看護学生のアイデンティティ・ステータスが、学年の変化、看護教育課程の違い、准看護婦資格の有無、看護学校入学の決定時期、母親の職業形態や進路選択の影響度、介護や身近な死の経験、看護学生としての誇りの有無、自分の興味や適性から入学したか否か、戴帽式を肯定的に評価しているかに影響されていたと報告した。また、学校や学年のあり方は、アイデンティティ・ステータスに比較的大きな影響力を及ぼしていること、職業意識や学生の価値観に密接に結びついていること¹⁵⁾が報告されている。

5年一貫生は15歳から20歳という思春期から青年期の発達段階にあり、自我と職業のアイデンティティを発達させるという2つの課題を有している。高校進学時から看護師になりたいという意志をもって入学してきた多くの生徒は、青年期に強い自立志向性をもち、はっきりとした職業的自立を目指していると言える。上田ら¹⁶⁾は5年一貫生の職業的アイデンティティは学年進行に伴って低下し、卒業年次には再び上昇すること、また新谷ら¹⁷⁾は、ひとつの選択肢である高等学校衛生看護科をきっかけに看護の仕事を選択し、5年間に渡る職業教育のなかで実習体験を通じて看護に関心をもち受け入れていく経験をするにより看護への思いを強くし、また高等学校衛生看護科生をかこむ環境から適応力を培う経験から高等学校衛生看護科を続けていく力を養い、これらを看護師を目指す継続要因と説明した。そして、最終的に不足を補いながら看護師をやっていく自信という看護師としての職業的同一性を有するといった職業的同一性の形成過程が描き出されたこと、また川波ら¹⁸⁾は、高校過程から段階的に行われている臨地実習での体験を通して、看護に関心を持つことができ、職業的同一性が認識され、内発的動機づけが維持されたことを報告している。

一方で、高等学校・短期大学・大学の看護学生を対象とした職業的同一性の形成に関する研究では、入学以前から看護師志望の強い学生は他の学生と比較して職業的同一性が形成されやすい傾向であるが、早期に職業選択をした高等学校衛生看護科生は、職業的同一性の早期完了に陥りやすいこと⁵⁾¹⁴⁾¹⁹⁾を指摘されている。しかし、青年期におけるアイデンティティと看護師の職業的

アイデンティティの形成が平衡して行われている5年一貫生のアイデンティティ形成について十分に明らかにされてない。そのため本研究では、中学卒業時に看護師という職業選択をした5年一貫生を対象に、アイデンティティ・ステータス論の尺度からアイデンティティ達成のスタイルを分析し、同一性達成状況を分類することを目的とする。また、それらが生徒の背景となる基本属性とどのような関連があるのかを明らかにする。

2. 方法

2-1. 対象

A県高等学校看護（5年一貫養成課程）1年生から5年生 全在籍者計391名（男子13名・女子378名）

2-2. データ収集方法

平成26年3月10日～3月24日に、各担任を通して無記名自記式調査票の配布および回収を行った。

2-3. 質問内容

(1) 職業的同一性地位テスト

職業的同一性地位テストは、松下¹⁴⁾がMarcia, J. E.のアイデンティティ・ステータス論をもとに作成した中西の「自我同一性地位テスト」を参考に看護学生・看護師を対象に開発した尺度である。各尺度の項目は、「職業的同一性拡散因子」10項目、「職業的同一性達成因子」5項目、「資格志向因子」3項目、「早期完了因子」3項目の計20項目である。配点の方法は、（5：非常によくあてはまる、4：ややあてはまる、3：どちらともいえない、2：あまりあてはまらない、1：全くあてはまらない）の5段階評定法である。（質問項目は表2を参照のこと）

(2) 基本属性

基本属性は、松下の研究報告から職業同一性形成に関連があるとされた項目から引用した。その内訳は①学年、②看護職決定時期、③家族や親類に看護職、④身近な死の経験、⑤自分の病気や入院経験、⑥家族の入院、⑦祖父母との同居、⑧受験校の希望順位、⑨受験決定者、⑩受験決定時期である。尚、男子は少数であるため、個人の特定をしないよう配慮する理由で基本属性から除いた。

2-4. データ分析方法

- (1) 職業的同一性地位テスト20項目について、単純集計で得点分布を確認し、主因子法、Promax回転の因子分析を行い、その結果得られた因子を下位尺度として用いた。
- (2) 各因子別に信頼性係数（Cronbachの α 係数）を算出し、その有意性を検討した。
- (3) 各項目と尺度案全体の内的整合性を検証するため、因子分析後に抽出された各項目と当該項目を除いた各因子間得点を単純加算した得点間の相関係数を求め、その有意性の検定を行った。
- (4) 因子分析から得られた下位尺度ごとの合計点を従属変数、基本属性を独立変数とし、単変量解析ではt検定または一元配置の分散分析を、多変量解析では分散分析及び多重比較

(tukey法)を行った。

分析には、統計解析用ソフトウェアIBM SPSS Statistics 22 version22を使用した。

2-5. 倫理的配慮

本研究の調査時の手続きとして、調査の趣旨、方法及び倫理的配慮を学校長に説明し、職員会議で許可を得た。また、調査前に研究の目的と倫理的配慮（対象者に調査の参加は強制ではないこと、回答は自分の意志で決めることができること、個人の成績評価には一切関係しないことや、回答したくない場合はしなくてもいいこと、それによる不利益はないこと、また調査用紙は研究目的のみに使用し、すべて番号で取扱いデータとして処理し、個人が特定されないこと）について文書で説明し、了承を得た。

3. 結果

3-1. 調査対象者の概要

対象者391名のうち、368人より回答があった（回収率94.1%）。そこから無回答と信頼性の乏しい回答を除き、最終有効回答数は357名（1年生77名、2年生70名、3年生68名、4年生72名、5年生70名）、有効回答率は91.3%であった（表1）。他の基本属性として特徴的なことは、「看護職決定時期」については、小学校3年生までの早期に決定した者が約30%、「身近な人の死」や「家族の入院経験」のある者が約70%、本校を第1志望で入学した者が約90%であった。

3-2. 職業的同一性地位テストの因子分析

職業的同一性地位テスト20項目の質問項目について得点分布を確認したのち（表2）、主因子法による因子分析を行った。その結果、固定値1以上の因子が3つ認められた。固有値の推移は、第1因子から4.57、2.13、1.50、…であり、因子の解釈の可能性を考慮すると3因子が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法、Promax回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が0.4を満たなかった③⑦⑩⑮の4項目を分析から除外し、残りの16項目に対して再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。なお3因子での累積寄与率は51.21%であった（表3）。

第1因子は「もっとよい職業があれば変えてもいい」「自分の自信がなくて考えがぐらつく」「あきらめて別の職業につく」といった看護職の選択の迷いや葛藤、職業変更を希望する等の7項目で構成されていることから「看護職への揺らぎと迷い」と命名した。

第2因子は「将来に職業に対しての心強さ」「両親との関係や親孝行」「よほどのことがないかぎり現在の志望を変えることはない」といった看護職を選択したことの自信や積極的関与に関する内容の6項目で構成されていることから「看護職への自信と傾倒」と命名した。

第3因子は「できるだけ多くの資格をとりたい」「自分の成長に結びつくならどんな仕事をやってみたい」をいう資格志向に関する内容の3項目で構成されている。これは松下¹⁴⁾の調査結果の資格志向因子と項目が一致しているため同じ因子名の「資格志向」とした。以上の3因子を既存の5段階得点を加算したものを、その因子得点とし、「看護職への揺らぎと迷い」(range7～35)、「看護職への自信と傾倒」(range6～30)、「資格志向」(range3～15)とした。

それぞれの因子ごとの信頼性係数（Cronschの α 係数）は、「看護職への揺らぎと迷い」で

.782、「看護職への自信と傾倒」で.781、「資格志向」で.721であり、信頼性が確認された。更に因子間の関係性を明らかにするために相関係数 (Pearson) を求めた。3つの因子の各合計点間の相関関係を表4に示す。「看護職への揺らぎと迷い」と「看護職への自信と傾倒」では有意な負の相関 ($r=-0.478$, $p<0.01$)、「看護職への自信と傾倒」と「資格志向」では有意な相関 ($r=0.181$, $p<0.01$) を示した。(表4)

表1 基本属性と設問の回答別にみた数・割合 (N=357)

		人数	%
学年	総数	357	100.0
	1年	77	21.6
	2年	70	19.6
	3年	68	19.0
	4年	72	20.2
	5年	70	19.6
看護職決定時期	総数	340	100.0
	小学校前～小3	104	30.6
	小4～中2	149	43.8
	中3	87	25.6
家族や親類に看護師	総数	356	100.0
	いる	131	36.8
	いない	225	63.2
身近な人の死の経験	総数	356	100.0
	ある	254	71.3
	ない	102	28.7
自分の病気や入院経験	総数	357	100.0
	ある	144	40.3
	ない	213	59.7
家族の入院経験	総数	356	100.0
	ある	274	77.0
	ない	82	23.0
祖父母との同居	総数	357	100.0
	ある	149	41.7
	ない	208	58.3
受験校の希望順位	総数	356	100.0
	第1希望	326	91.6
	他をあきらめた	30	8.4
受験決定者	総数	356	100.0
	自分で決めた	232	65.0
	自分以外	125	35.0
受験決定時期	総数	355	100.0
	直前 (中学校3年)	192	54.1
	それ以前	163	45.9

無回答を除いてパーセントを算出した。

表2 職業的同一性地位テスト 記述統計量

	平均値	標準偏差
1 私には将来就きたいと思っている職業がある。両親は私がおその職業に就くことを賛成してくれているし、私もその職業に就くことは親孝行の1つだと思っている。	4.35	0.83
2 以前私は将来の職業についていろいろ考えたり迷ったりしたが、今ははっきり決心がついた。	3.90	0.94
3 私はどのような仕事か自由かは判らないが、とにかく自由な仕事がいい。	3.19	1.02
4 将来、私の興味を持てる職業に就きたいと考えているがまだ具体的に決めていない。	2.46	1.15
5 自分の自由な時間が持てる職業がいい。仕事が忙しすぎるにはいやだ。	3.33	1.13
6 私には一応将来就きたいと思っている職業があるのだけれど、自分に自信がなくて考えがぐらつくことがある。	2.96	1.24
7 私は今のところ、こういう職業をしたいというものがない。	1.76	0.91
8 私は自分が将来の職業を目指して着実に歩んでいると思う。だから、よほどのことがないかぎり、その志望を変えることはないと思う。	4.16	0.90
9 私には理想の職業があるのだけれど、私の能力からすれば実現は無理だろう。結局、それをあきらめて別の職業に就くのではないかとと思う。	2.32	1.10
10 私の考えている将来の職業について両親も賛成してくれているので心強い。	4.14	0.95
11 私が将来就きたいと思っている職業は小さいときから考えていたものだ。その職業に就くことに疑問を持ったことはない。	3.06	1.25
12 私は将来の職業として考えているのがある。しかし、もしもっと良い職業があれば、その職業を変えても良いと思っている。	2.96	1.19
13 私はできるだけ多くの資格をとりたい。	3.53	1.06
14 私は将来の職業についてすんなり決めたとする。	3.90	1.02
15 今私が就きたいと考えている職業は、いくつかの職業の中からよく検討して決めたものである。	2.71	1.13
16 自分の成長に結び付くことだったら、どんな仕事でもやってみよう。	3.48	1.08
17 私は当面の看護師国家試験に合格したら、また違う資格取得のための試験に挑戦してみようと思	3.08	1.14
18 私はかつて自分に向いた職業があると思っていたが迷いが生じ、今はどのような職業が良いか模索中である。	2.26	0.98
19 今勉強していることは将来の職業に結び付いており、大変役に立つと思う。	4.37	0.70
20 前の職業と全く関係がない職業でも、よい職業があればそのほうを選びたい。	3.12	1.12

※5：非常によくあてはまる 4：ややあてはまる 3：どちらともいえない 2：あまりあてはまらない 1：全くあてはまらない

表3 職業的同一性地位テスト 因子分析結果

	因子Ⅰ 看護職への揺らぎと迷い	因子Ⅱ 看護職への自信と傾倒	因子Ⅲ 資格志向
12 私は将来の職業として考えているのがある。しかし、もしもっと良い職業があれば、その職業を変えても良いと思っている。	.779	.111	-.008
20 前の職業と全く関係がない職業でも、よい職業があればそのほうを選びたい。	.721	.028	.171
6 私には一応将来就きたいと思っている職業があるのだけれど、自分に自信がなくて考えがぐらつくことがある。	.650	.028	-.085
5 自分の自由な時間が持てる職業がいい。仕事が忙しすぎるにはいやだ。	.636	.258	-.135
4 将来、私の興味を持てる職業に就きたいと考えているがまだ具体的に決めていない。	.635	-.041	-.025
9 私には理想の職業があるのだけれど、私の能力からすれば実現は無理だろう。結局、それをあきらめて別の職業に就くのではないかとと思う。	.624	-.150	-.029
18 私はかつて自分に向いた職業があると思っていたが迷いが生じ、今はどのような職業が良いか模索中である。	.495	-.331	.159
1 私には将来就きたいと思っている職業がある。両親は私がおその職業に就くことを賛成してくれているし、私もその職業に就くことは親孝行の1つだと思っている。	.174	.822	.018
10 私の考えている将来の職業について両親も賛成してくれているので心強い。	.039	.789	.009
14 私は将来の職業についてすんなり決めたとする。	.149	.667	-.078
19 今勉強していることは将来の職業に結び付いており、大変役に立つと思う。	.034	.663	.113
8 私は自分が将来の職業を目指して着実に歩んでいると思う。だから、よほどのことがないかぎり、その志望を変えることはないと思う。	-.216	.618	.103
2 以前私は将来の職業についていろいろ考えたり迷ったりしたが、今ははっきり決心がついた。	-.241	.531	-.034
13 私はできるだけ多くの資格をとりたい。	-.039	.000	.828
17 私は当面の看護師国家試験に合格したら、また違う資格取得のための試験に挑戦してみようと思	-.042	-.038	.824
16 自分の成長に結び付くことだったら、どんな仕事でもやってみよう。	.031	.109	.720
寄与率 (%)	28.539	13.319	9.355
累積寄与率 (%)	28.539	41.858	51.213

表4 各因子の相関関係

	看護職への揺らぎと迷い	看護職への自信と傾倒	資格志向
看護職への揺らぎと迷い	—	—	—
看護職への自信と傾倒	-0.478 **	—	—
資格志向	-0.013	0.181 **	—

注) **: p<0.01 * : p<0.05

(2)「看護職への自信と傾倒」尺度

単変量解析の結果、「看護職決定時期」、「受験校の希望順位」、「受験決定者」、「受験決定時期」に有意な差が見られたが、多変量解析の結果では、「看護職決定時期」、「受験決定者」のみに有意な差がみられた。具体的には「看護職決定時期」では、小学校3年生までに早期に決定した群が中学校3年生の直前で決定した群より有意に高かった。「受験決定者」で、自分で決めた群が、他者が決めた群よりも有意に高かった。

(3)「資格志向」尺度

単変量解析と多変量解析共に「学年」で有意な差がみられた。具体的には、学年を追うごとに得点が低くなり、1年生と5年生、2年生と5年生で有意な差がみられた。

4. 考察

4-1. 職業的同一性地位テストについて

本研究では、高校進学段階で看護職を選択した5年一貫生を対象に職業的同一性地位テストを調査した結果、看護職に対して迷いや疑問、揺らぎをもっているかの「看護職への揺らぎと迷い」、看護学生として学ぶことに自信があり、看護職に対して傾倒している「看護職への自信と傾倒」、資格取得に対して意欲的に考えているかの「資格志向」の3つの下位尺度で構成されていることが明らかになった。Marcia, J. E.は、青年期の同一性の達成状況を心理社会的基準からの確にとらえるために、アイデンティティの達成を、「意味あるいくつかの可能性について迷い決定しようと苦闘する危機」と、「自分の信念を明確に表現したり、それに基づいて行動する傾倒」の2つの基準により、「同一性達成」「モラトリウム」「早期完了」「同一性拡散」の4つに類型化した⁵⁾。しかし今回の結果では、この4つの因子が抽出されなかった。「看護職への揺らぎと迷い」の項目に注目すると、〈職業に対していくつかの選択肢について現在も模索し、迷っている姿〉や、〈危機を経験することなく他職におもむく態度〉、〈危機による無力感から積極的には看護領域に関与しえない態度〉など、モラトリウムや同一性拡散の要素が含まれている。また、「看護職への自信と傾倒」では、〈看護職に対して迷いや葛藤がなくただ看護職に就く〉とする早期完了の要素と、〈いくつかの可能性について熟慮した上、看護職に就くことを決意している〉同一性達成の要素が混在し構成されている。このように看護職に傾倒しているのか、危機状態にあるかの大きく2つの因子に分かれた理由として、今回の調査対象が、看護職を選択して専門高校に入学した生徒ではあるが15歳から20歳と若く、意味あるいくつかの可能性について迷ったり、決定しようと苦闘する危機的経験の不足や、自分の信念を明確に表現したり、それに基づいて行動する傾倒レベルの未熟さが考えられる。また、早くから職業的傾倒を行った看護科高校生の多くが早期完了であること⁵⁾¹⁴⁾¹⁹⁾が明らかにされているが、今回の調査で早期完了の因子がはっきりと抽出されなかったのは、調査対象のすべてが高校進学段階で看護職を選択している早期完了が多い集団であったからだと推察される。

「資格志向」は、松下¹⁴⁾の結果と構成項目が同様であった。先行研究²⁰⁾²¹⁾では、これらの項目を職業に関してその選択を猶予する内容、つまり資格志向を看護職以外の他職種への変更と捉えとしてモラトリウム因子に分類していた。しかし、今回の結果ではこの「資格志向」と「看護職との揺らぎと迷い」との相関関係がなく、「看護職への自信と傾倒」と相関関係があったことから、職業に迷い、他の職業の可能性を探っているという因子ではなく、看護師になりたいという意志に加え、

更なる資格を得ていきたいという意欲を示す尺度と考えた。本研究において、5年一貫生のアイデンティティ達成のスタイルは、従来のスタイルで分けられることなく、現在職業について迷って揺らいでいるのか、看護職を選択した自分に自信を持ち職業に傾倒しているのか、更なる資格を持つと意欲的にとらえているのかの3つのスタイルに分類できた。これは、5年一貫生以外の看護学生の報告^{14) 15) 20) 22)}とは異なっていることから、5年一貫生の特徴の1つであると考えられる。

4-2. 職業的同一性地位の各尺度と基本属性との関連

因子分析で抽出された3つの下位尺度を生徒の基本属性で多変量解析をした結果、「看護職への揺らぎと迷い」では「学年」、「看護職決定時期」と「受験決定者」に、「看護職への自信と傾倒」では「看護職決定時期」と「受験決定者」に、「資格志向」では「学年」のみに有意な差がみられた。この結果は、先行研究^{14) 21)}よりも生徒の背景として影響されている項目が少ないことを示している。つまり、早く看護職なると決めた群と自分の意志で入学を決めた群が、有意に職業に対しての揺らぎや迷いが少なく、看護職に対しての自信と傾倒が強いことが明らかになった。これは本多²³⁾が医療系大学生の進路決定のプロセスにおいて、早期決定型が明確な職業イメージを持ち、また主体的な決定を行うことが、職業的アイデンティティを高めるという結果と一致する。

「看護職への揺らぎと迷い」を学年で分析すると、1年生が最も低く、2年生が上昇し、3年生では再び下降、4年生では上昇し、5年生では再び下降するMの軌線を描いている。これは同一性拡散得点が学年進行とともに高まる^{14) 21)}や、モラトリウム得点が高学年になるほど低くなる²¹⁾、看護学生の最終学年の前半期までに職業レディネスは低下する²⁴⁾という結果と類似している。また入学時に職業的アイデンティティが高く、途中の学年で低くなり、卒業時には再び上昇するという結果は、先行研究の結果^{25) 26) 27)}とも一致し、また、1年生から2年生にかけての理想と現実のギャップによる職業環境イメージのネガティブ化²⁸⁾とも関連する。高校時代にモラトリウムを経験し、職業的選択を行った女子青年の半数は、すでに進路発達上の葛藤を解決して心理的に安定した達成地位を到達していること¹⁹⁾が明らかにされている。本研究では、高校入学時に進路発達上の危機を経験せず入学した生徒の多くは、高校入学後、看護の専門教育を受けながら職業に対する迷いや葛藤を経験し、揺らぎがあることが明らかになった。この理由として、看護学校入学後、専門教育が本格的にはじまるに従って理想と現実とのギャップから同一性拡散が強まること^{14) 21)}からも説明できる。しかし5年生では、揺らぎや迷いが下降していることから、その危機を経験した後は、迷いは少なく、心理的に安定していると考えられる。つまり、入学後に職業に対する迷いや揺らぎなどを経験することは、本来青年期で経験すべき職業選択に関する危機を経験する⁵⁾ことであり、迷いや揺らぎは青年期のアイデンティティ形成には不可欠であり、その経験がその後の安定した職業観やアイデンティティ形成につながると考えられる。

本研究結果で注目すべきは、5年一貫生においては、その揺らぎが在学中1度ではなく、2度の揺らぎがあり、Mの基線を描いていることである。これは5年一貫生が、学年進行に従い意欲の向上や減退を繰り返す²⁹⁾という報告と一致する。つまり、5年間の中で何度か揺らぎを経験することも5年一貫生の特徴であると言える。看護学生は、職業教育の場で生活している以上、職業領域のステータスは、現在の満足感や将来の不安感とも密接な関係をもっていると考えられること¹⁵⁾からも、入学以降アイデンティティの揺らぎを何度も経験しながら職業的アイデンティティを形成し、この揺らぎによって自身のアイデンティティの形成が促されると推察される。

「看護職への自信と傾倒」では、「看護職への揺らぎと迷い」とやや強い負の相関関係が示され

たにもかかわらず、学年差が見られず、先行研究²¹⁾と異なる結果になった。これは学年進行にともない、看護職へのイメージの低下や現実の厳しさを認識し、職業に対して迷いや葛藤が生じているにもかかわらず、看護職への憧れや看護職を選択したことに対する自信は揺るがない強い因子として持ち続けていることを示している。その理由として小さいころから看護師という職業を意識してきたことや、高校入学時の15歳から看護師という同じ夢を持った同年齢の仲間と共に勉強しているという学校環境、生徒のほとんどが家族と同居しており、家族からのサポート力などが看護職への自信と傾倒に関与していると思われる。つまり、看護職に対して迷いが生じ、他の選択肢を模索する「看護職への揺らぎと迷い」が増強する2年生から4年生の時期において、一方では職業への憧れや家族のサポートなどは継続しており、相反する状況を抱え込んでいるストレスの多い時期であると考えられる。

「資格志向」では、学年が進むにつれてこの志向が有意に少なくなっていた。つまり学年が進行するに従い、資格取得の選択肢が狭くなっていることがわかる。入学時には看護師に加え、その他の資格取得を夢見ていたが、入学後に看護の勉強や病院実習を通して現実に直面し悩み、揺らぎを経験することで、看護師になるという選択だけを優先して考えている結果だと言える。

本研究結果のように各尺度得点が学年において変化するのは、アイデンティティ・ステータス論が、固定化されるのではなく、アイデンティティ達成に至るプロセスの途中であることを示す流動的なステータス³⁰⁾であることが示された。5年一貫生は15歳から20歳と思春期から青年期への移行期にあり、自我と職業のアイデンティティを発達させるという2つの課題を有し、心身共に変化の大きい時期である。5年間の中で、看護職に対しての憧れや傾倒は持続したまま、専門的授業や臨地実習などにおいて様々な危機を経験し、看護職への迷いや揺らぎは複数現れることが明らかになったが、それは早期に職業への社会化が開始された5年一貫生の特徴²⁹⁾であろう。そのため5年一貫教育においては、生徒の成長とその中で起こりうる危機経験による揺らぎを予測した上で、明確な職業的イメージを持ち続けられ、また職業的な自分らしさの実現感を持てるような教育的関わりが必要であると考えられる。

4-3. 今後の課題

本研究では、アイデンティティ・ステータス論に注目し実施した。研究結果では、先行研究のように危機の経験や傾倒の程度からは同一性地位を見出すことができなかつた。アイデンティティ・ステータス論については、Marcia, J. E.の「危機」の捉え方についての批判⁴⁾も存在し、思春期から青年期の発達段階にある5年一貫生の職業的アイデンティティを明らかにするためには、今回の尺度のみではなく、青年期のアイデンティティ形成などに関連性を考慮した上で、形成状況や因子を明らかにすることが必要であると考えられる。

5. 結論

高等学校看護5年一貫生に職業的同一性地位テストを実施し、因子分析およびその結果と、生徒の基本属性との関連を検討したところ、以下のことが明らかになった。

1. Marcia, J. E.の危機経験の有無や傾倒の程度に分類されず「看護職への揺らぎと迷い」、「看護職への自信と傾倒」、「資格志向」の3つの下位尺度が抽出された。
2. 「看護職への揺らぎと迷い」を学年間（5学年）で比較したところ、1年生が最も低く、2年

生で有意に上昇し、再び3年生で下がり、4年生で上昇し、5年生には1年生ほどではないが再度下降するMの基線を描いた。これは、5年間で何度か経験する揺らぎによって、自身の職業的アイデンティティの形成が促された結果と推察された。

3. 「看護職への自信と傾倒」では、有意な学年差が認められなかった。これは、看護職に就くことに迷いや揺らぎが生じて、看護職への傾倒は揺るがないことによると思われる。
4. 早期に看護職なると決めた群と自分の意志で5年一貫校入学を決めたという群が、有意に看護職に対しての揺らぎや迷いが少なく、自信と傾倒が強かった。
5. 「資格志向」は、学年が進むにつれて資格志向傾向が有意に少なかった。

謝辞

調査の場を与えてくださいました5年一貫校と、貴重な時間を割いて調査にご協力くださいました教職員と生徒の皆様にご心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省：高等学校の看護教育に関する検討会報告書
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/12/_icsFiles/afieldfile/2009/03/31/1216918_001_2.pdf, 2008. (アクセス日 2015年9月27日)
- 2) 独立行政法人統計センター：看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001139988>, 2015. (アクセス日2015年9月27日)
- 3) 厚生労働省：第103回看護師国家試験合格状況（追加試験を含む）
http://www.mhlw.go.jp/general/sikaku/successlist/.../kangoshi_jyoukyou.pdf, 2015. (アクセス日2015年9月27日)
- 4) 谷冬彦：自我同一性の人格発達心理学，ナカニシヤ出版，p16-38，2008.
- 5) 中西信男：人間形成の心理学，ナカニシヤ出版，1989.
- 6) 下山晴彦：大学生の職業未決定の研究，教育心理学研究34（1），20-30，1986.
- 7) 岡本祐子・松下美知子：女性のためのライフサイクル心理学，福村出版，p10，1994.
- 8) グレック美鈴：看護師の職業的アイデンティティに関する中範囲理論の構築，看護研究35（3），2-9，2002.
- 9) 岩井浩一・澤田雄二他：看護職の職業的アイデンティティ尺度の作成，茨城県立医療大学紀要6，57-67，2001.
- 10) 久川洋子：看護学生におけるアイデンティティ達成状況と学習行動の関連-アイデンティティ達成への教育の必要性をめぐって-，天使女子短期大学紀要18，1-13，1997.
- 11) 江口瞳・片山はるみ他：入学初期の看護大学生が抱く看護師イメージの構造と職業的アイデンティティとの関連，山陽看護学研究会誌1（1），21-30，2011.
- 12) 松下由美子・木村周：新卒看護婦の職業的同一性とキャリア観との関連-入職オリエンテーション期における意識調査より-，産業カウンセリング研究2（1），21-27，1998.
- 13) 山内栄子・松本葉子他：現代の看護系大学生の学生生活における職業的アイデンティティの形成過程，日本看護学教育学会誌18（3），11-24，2009.
- 14) 松下由美子・木村周：看護学生の職業的同一性形成を規定する要因の検討，教育相談研究31，29-45，1993.
- 15) 高橋征仁・田中マキ子：看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究-アイデンティティ・ステイタス法の構造化の試み-，山口大学文学會誌，37-53，1997.
- 16) 上田伊佐子・近藤春江他：5年一貫課程の看護学生の「職業的アイデンティティ」の経年的変化と臨

- 地実習が与える影響, 看護教育51 (8), 702-707, 2010.
- 17) 新谷喜恵・内田真紀他: 高等学校衛生看護科生の職業的同一性の形成過程, 日本看護学会誌16 (1), 97-105, 2006.
 - 18) 川波綾子・尾崎フサ子: 5年一貫教育における看護基礎教育に関する検討-新卒看護師の看護実践能力を通して-, 第41回看護教育, 221-224, 2010.
 - 19) 中西信男・水野正憲他: アイデンティティの心理, 有斐閣, p162-172, 1985.
 - 20) 風岡たま代: 看護学生の共感性に関する一考察-職業的同一性との関係-, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要13, 15-26, 2005.
 - 21) 安藤祥子・内海滉: 看護学生の自我同一性に関する研究-職業的同一性形成を規定する教育的要因-, 日本看護研究学会雑誌18 (3), 7-19, 1995.
 - 22) 落合のり子・堤雅雄: 青年期のアイデンティティと自己認知-看護学生に対する調査を通して-, 島根大学教育学部紀要31, 21-40, 1997.
 - 23) 本多洋子・落合幸子: 医療系大学生の進路決定プロセス尺度作成の試み-進路決定プロセスの類型と職業的アイデンティティからの検討-, 茨城県立医療大学紀要11, 45-54, 2006.
 - 24) 白鳥さつき: 看護学生の職業社会化に関する研究, 山梨医大紀要19, 25-30, 2002
 - 25) 波多野梗子・小野寺杜紀: 看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化, 日本看護研究学会雑誌16 (4), 21-28, 1993.
 - 26) 小藪智子・黒田裕子他: 看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究 (第二報) -経年変化から考える教育的支援-, 川崎医療短期大学紀要27, 25-29, 2007.
 - 27) 関口恵子: 3年課程の看護学生におけるアイデンティティの形成-職業的アイデンティティとの関連に注目して-, 埼玉医科大学短期大学紀要23, 31-43, 2012.
 - 28) 江口瞳・寺澤孝文: 看護師イメージの因子構造と学年進行による看護師イメージ得点の変化, 日本看護研究学会雑誌29 (4), 71-80, 2006.
 - 29) 田嶋紀子・舟島なをみ他: 5年一貫看護師養成課程に在籍する生徒の学習経験に関する研究, 看護教育学研究22 (1), 41-56, 2013.
 - 30) 岡本祐子: アイデンティティ生涯発達論の射程, ミネルヴァ書房, p8, 89-120, 2002.

(2015年9月30日提出)

(2015年10月7日受理)

Professional Identity Formation and Related Factors among Nursing Students in a Five-Year Consecutive Training Course

MITSUHASHI, Yoshiko

Graduate School of Education, Saitama University

SEKI, Yukiko

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This study explores professional identity formation and related factors among student nurses who currently enrolled in a five-year consecutive training course at either a nursing high school and advanced coursed high school. Data was collected from 391 student nurses in years 1 through 5, aged 15 to 20 years old. The students were asked to fill out a questionnaire, including the occupational identity status test created by Matsushita in 2014. After excluding the invalid responses, we analyzed 357 (97.0%) valid questionnaires. As a result of the factor analysis on 20 items of the occupational identity status test, three primary factors were extracted: wavering and hesitation toward being a nurse, confidence and commitment to selecting the occupation of nurse, and qualification-oriented. Moreover, it was revealed that those who decided to be nurses when they were 13 years old or younger and who decided to be a nurse on their own were statistically related to having less wavering and hesitation toward being a nurse and having higher confidence and commitment to the selection of this occupation. Focusing on the level of wavering and hesitation toward being a nurse by years enrolled in the course, it increased significantly in the second year, decreased in year three before increasing again in the fourth year, and then decreased again in the fifth year. We considered that this trend results in the formation of stable occupational identity in students' fifth year of the source, though they experience hesitation and commitment again and again, and experience wavering throughout their five years.

Keywords: professional identity, nursing education, five-year consecutive nursing course